リトル・ニンジャ　*Swift Kick… Backwards! by Busty2b*

私が、いわゆる護身術を父から教わったのは中学生のときだった。それが、私の実生活上、何かの役に立ったことはなかった。トーキョーに一年間の留学をするまでは。

その日、私は買い物のため街を歩いていた。ある角を曲がって裏通りに入ったとき、額のはげ上がった中年の小男が、痩せた小さな少年に襲いかかっているのを目にした。小男の手にナイフが握られている。少年は脅え、抵抗する気配もなかった。

私はそのとき、無意識のうちに行動を開始していた（だれも信じてはくれないが、私は思慮深いほうだ。あの日の行為は、ふだんの自分としては、予想外のことだった）。

私はその大男の背後に回り込み、背中を蹴った。彼を地面に這わせるには、不十分なキックだった。彼は振り返り、私を見た。そして、曖昧な安っぽい笑みを浮かべ、口を開こうとした。

彼が言葉を発する前に、私は彼の股間を蹴り上げた。

彼の眼が飛び出しそうに見開き、喉からきぃきぃ声が迸り、そして倒れた。

私は少年の手をつかんだ。

「こっちよ！」

私は叫び（母国語である英語で）、彼の手を引いた。彼はなにか叫んだが、私について走った。ファーストスードの店が見えるまで走り、店内に入った。しばらく入口のところでハアハア息を

整えていたが、やがて私を見上げる少年の視線に気づいた。
「大丈夫？」
私は訊ねた。彼はきょとんとして私を見つめている。私ははっとして、今度は日本語で同じことを訊ねた。
「大丈夫」
彼は答えた。
「どうもありがとう」
「ドウイタシマシテ」
私は日本語で答えた。
会話はそれで途切れた。しばらく気まずい時間が流れた。私は仕方なく、なぜ、やり返さなかったの？　と訊ねた。彼は、大きな黒い瞳で私を見つめた。
「やり返してたよ」
彼は言った。
「でも……フーマのやつ、ぼくよりも凄い忍術の使い手だから……」
「え？　え？　え？」
私は、彼を押し止めた。
「忍術？」

彼は頷いた。
「うん……要するにニンジャが使う魔術さ」
私はまじまじとちっぽけな少年を見つめた。
「あんたたちは、そのニンジュツとやらで戦っていたというわけ？」
「うん、まあ……」
「……私にはそうは見えなかったわ」
私は言った。
「あの男、ナイフであんたを切りつけていたじゃない」
「そう見えた？」
彼は、悲しそうに肩を竦めた。私は頭が混乱していた。日本語は得意なつもりだけど、どう言えば、話が通じるのだろう？
「あのねえ」
私は言った。
「私はニンジュツとやらは使えないけど、彼をやっつけちゃったでしょ」
少年の眼が輝いた。
「うん。凄かったよ！」
彼は感激した面持ちになった。

「ぼくも、あの技が使えたらな！」
私は彼を見つめた。
「あのね、水を差すようで申し訳ないけど」
私は言った。
「誰にだってできることよ」
少年は頬を拭った。ひどく血が流れていることに気づき、私はバッグから消毒液と絆創膏を取り出した。私は彼を椅子に座らせ、ソーダを二つ注文し、手当てを始めた。
彼は、治療を受けながらも、ムキになって反論した。
「ぼくはそうは思わない」
彼は言った。
「ぼくには、あなたみたいな技は使えない」
「なぜ？」
私は、ナプキンで血痕を拭いながら訊ねた。
「なぜって、ぼくはカムイだからさ」
彼は、やや用心深く言った。
「そう？　私はルーシー」
私は、絆創膏を貼りつけながら応じた。

「だからなんだっていうの？」
私は彼の真向かいに座り、自分の飲み物を手にした。
「君は、世界の運命を背負っているわけじゃない」
彼は沈んだ調子で言った。私はソーダを吸いながら、彼を見つめ、訊ねた。
「カムイはいくつ？」
「十五歳。君は？」
「二十一歳よ。まあ、私も君と同じ年頃には、世界を背負っているなんて感じてたこともあったわ。でも……」
「ちがうよ、君はわかってない！」
彼は怒鳴り、テーブルをどんと叩いた。彼のコップが倒れた。
「本当にそうなんだ！」
「ちょっと、カムイ。テレビの見すぎじゃないの？」
「ちがう！」
私はため息をついた。彼は、しばらくテーブルに零れたソーダが広がっているのを見つめていたが、やがて顔をあげて私を見た。彼の眼がめらめらと燃えていた（決して比喩ではない。私は、ほんとうに炎を見たのだ）。
「ルーシーさん」

彼は、Lushii-san と発音した。
「ルーシーさん、一緒に散歩してくれる？」
「なぜ？」
「ぼくの言ったことがほんとうだと証明したいんだ」
私は肩を竦めて立ち上がり、バッグを肩にかけた。
「しゃあないな」
私は、先に行け、と身振りで示した。彼は謎めいた表情を浮かべて私を見たが、立ち上がって歩きはじめた。

しばらく黙って肩を並べて歩いた。気まずい雰囲気を打開しなければならない、と少年は思ったようだ。会話の糸口を見つけようと、彼は口を開いた。
「ルーシーさんは、どこから来たの？」
「ニューイングランドよ」
私は答えた。
「今年から、トーキョーの大学に留学してるの」
「ニューイングランドね」
彼は頷いた。

「それって……」
「おい、カムイ」
背後から声が響いた。

振り向くと、さきほどカムイを襲っていた禿の小男――フーマというらしい――と、片目の、「地獄から来たビジネスマン」とでもいうべき風体の長身の男が立っていた。
フーマは言った。
「さっきはとんだ邪魔が入ったが、今度こそ決着をつけようぜ」
カムイは、澄んだ瞳を私に向けた。それから、じっとフーマを見つめた。フーマは、ナイフを懐から取り出して構えた。
「セイシロウ」
フーマが、ビジネスマン風の長身の男に言った。
「お前は女をやれ」
ビジネスマン風体の片目はニヤリと笑い、私を見た。
「Hello 」
彼は英語で言った。
「俺の名は、サクラヅカ・セイシロウ。お前は？」

「ルーシー・エバンズよ」
私はじっとセイシロウを見つめて言った。
「お会いできて光栄だ、ミス・エバンズ。気の毒だがここで死んでもらう」
彼は一歩前に出た。
「やってみなさいよ」
私は呟き、いきなりみぞおちにひじ鉄を食わせた。セイシロウの息が詰まった。私は彼の股間を膝で蹴り上げ、顎にパンチを浴びせた。
彼は、目の前のアメリカ女が、そういう攻撃を浴びせてくることを予想していなかったに違いない。股間を押さえて倒れた。私はすかさず、効果的なキックを彼に浴びせた。
やがて、セイシロウは動かなくなった。
見上げると、カムイとフーマが私を見つめていた。
「ルーシーさん」
カムイは、畏敬の眼差しで言った。
「あなたが倒したのは、わが国最強の殺し屋だよ！」
「ンなわけないだろ」
私は肩を竦めた。
「私の攻撃をブロックすることすらできなかったのよ。こんなへなちょこが最強だったら、私一

人でニッポンを占領することだって不可能じゃなさそうね」
「それは、彼はルーシーさんがああいう手を使うとは予想してなかったからだよ。彼はあなたも……」
「ニンジュツを使うと予想していた、と言いたいの？　カムイ、もう一度、ニンジュツなんて言葉を使ったら、あんたを蹴り飛ばすわよ」
カムイはにっこり笑った。そして、いきなり踵を返し、フーマの側頭部を殴りつけた。フーマはへなへなとくずおれた。
「たしかに忍術より使えるね！」
カムイは、両手を握りしめて叫んだ。
「簡単でしょ？」
私は彼の肩を叩いて言った。
「おいで、アイスクリームおごってあげる」

数か月後、帰国した私は一通の手紙を受け取った。
「親愛なるルーシーさん。
あのときはありがとうございました。あなたのおかげで、世界は救われました。
カムイ・

シロー」
一枚の写真が添えられていた。カムイと、彼の仲間らしい六人の男が、叩きのめされて地面に転がる七人の男を見下ろして立っていた。
カムイはＶサインをしていた。
ルームメイトが肩ごしに写真を覗き込んだ。
「あら、かわいいじゃない」
彼女は言った。
「だれ、この子？」
「トーキョーで会った変なガキよ」
私は答え、手紙を押しやった。
「ただの、変なガキ」